

# コロナ禍でも進み続ける子ども食堂 アンケート調査から明らかになる子ども食堂再開に必要な要因

早津美帆

## 第1章 はじめに

本稿は、コロナ禍の子ども食堂の開催を左右する要因を明らかにすることを目的とし、調査・分析を通し、今後の子ども食堂が活動を考察したものである。

第1章では新型コロナウイルスが子ども食堂の活動に与えた影響について述べる。第2章では今回の研究の目的と分析方法を明らかにした。第3章ではアンケート調査の分析結果をグラフなどを用いて説明した。第4章ではコロナ禍の子ども食堂として東山ぐうぐう食堂の活動を紹介した。第5章では分析結果をもとに今後子ども食堂の再開に必要な要因についてまとめた。そして第6章では今後の子ども食堂開催に対する自らの意見を示した。本稿を通してコロナ禍の子ども食堂の活動状況を知り、どのように活動を進めているのか知っていただけたら幸いである。

2020年1月から徐々に新型コロナウイルス感染者が現れ、瞬く間に世界中で感染者が確認された。日本も例外ではなく、感染防止のため外出自粛などが求められた。また、新型コロナウイルスは接触感染だけでなく飛沫感染もあるとされマスクの着用が必須となった。それによりマスクをはずす必要のある食事を外でする人が減り、また減らすために飲食店などには時短営業の要請がされた。そして食事を提供する子ども食堂も同じように活動中止を余儀なくされた。

子ども食堂は公的な定義はないが、一般には「子供が一人でも行ける無料または低額の食堂」と定義されており、2019年時点で全国に3700箇所以上が存在している。愛知県では2019年版・愛知県「子ども食堂マップ」に追補合わせて112箇所が掲載されている。

子ども食堂の目的はおなかをすかせた子どもへの食事提供はもちろんだが、それに加え孤食の解消や地域交流の場づくりなどつながりを意識している子ども食堂も多い印象を持った。誰かと話す、誰かと一緒に食事をするということが大きな意味を持つ。しかしこの点がコロナ禍では控えるべきものとされ、密を防ぐためにもほとんどの子ども食堂が開催を中止の判断に至った。

では、落ち着く様子のない新型コロナウイルスの中、子ども食堂の状況は現在どうなっているかを今回のアンケート調査より報告する。

新型コロナウイルスが問題となる前の活動は、食事提供の場としての役割が多く、そこに追加で屋外・屋内のレクリエーションや、子育て支援、学習支援などが行われていた。レクリエーションは折り紙教室やマジックショー、工作教室やビンゴ大会など子ども食堂によって様々であり、毎回異なったレクリエーションを行う子ども食堂もある。

新型コロナウイルスの影響がでてからの活動は、食事提供の仕方をお弁当にして持ち帰りができるような工夫を行い、また食事提供は行わず食材提供だけのフードパントリーを開催するなどの変化がみられた。フードパントリーは利用者が多い場所では早くから並んで待っている人も見られた。子ども食堂運営者の方の話では、食事提供の子ども食堂に参加するのは子供がメインだったが、フードパントリーでは大人の利用が多かったそうだ。

## 第2章 研究目的と方法

今回のアンケート調査から、新型コロナウイルスが子ども食堂の活動に与えた影響はかな

り大きいことが読み取れた。そしてほとんどの子ども食堂運営者の方がコロナ禍前の状態の子ども食堂開催を望んでいる。その理由として、地域の方の再開の要望に応えたい、居場所としての役割を果たしたい、みんなで食を楽しみたいなどの回答があった。

しかし 2020 年 11 月時点でアンケート回答数の約半数、48%の子ども食堂が人数制限などの変化はありながら、子ども食堂を再開できている。(ここでいう子ども食堂は食事提供のことを指す。フードパントリーなどは含まない。) 新型コロナウイルスの感染の危険は子ども食堂運営者にもあるが、それでも再開を実現し、再開が出来なかったとしても再開したいという思いを抱いている状態に運営者の子ども食堂への強い思いを感じた。そしてこのことを通して私は、実際に再開できている所と再開できない所の違いが何であるのか疑問を抱き、他の子ども食堂の現状を知ることによって解決できる問題もあるのではないかと考えた。

今回、愛知県内の子ども食堂 81 箇所からアンケート調査の回答を得られた。

本稿ではアンケート調査の子ども食堂を再開するきっかけを中心に分析し、得られた情報を自由記述や地域などを合わせてさらに深く探求した。

### 第3章 研究結果

始めに子ども食堂の活動の変化について分析する。

下記の図 1 から、子ども食堂が活動休止した月で最も多いのは 3 月だということがわかる。この頃の社会情勢としては 2020 年 2 月 27 日に安倍首相により 3 月 2 日からの全国の小学校、中学校、高校などが春休みに入るまで臨時休校とするよう要請がされた。次に活動休止が増えた 8 月では愛知県が独自の緊急事態宣言をだした。また、図 2 の子ども食堂を再開への影響が大きかったものとして 1 位に最も選ばれているのが“9 緊急事態宣言の解除など情勢がおちついた”であることから新型コロナウイルス感染者の増加や、社会情勢は子ども食堂の活動に大きく影響を与えている。

図 2 の社会情勢以外の影響としては“5 スタッフの間で活動再開の考えが一致した”や“8 感染対策を徹底した”の回答も多い。新型コロナウイルスの感染の危険があるという現状を受け入れたうえでの行動が、再開へと進めたことが読み取れる。

その他には、少数ではあるが、“2 場所の確保”や“4 市区町村などから活動の許可がおりた”などもあった。これらは、子ども食堂運営者自身では解決することはできず、休止の選択をするしかない。

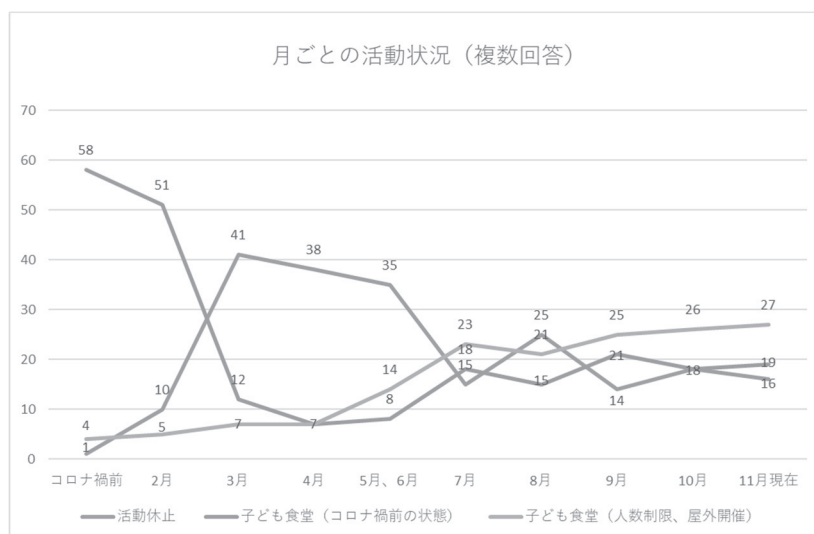


図1 コロナ禍前から11月時点での子ども食堂の活動状況の変化

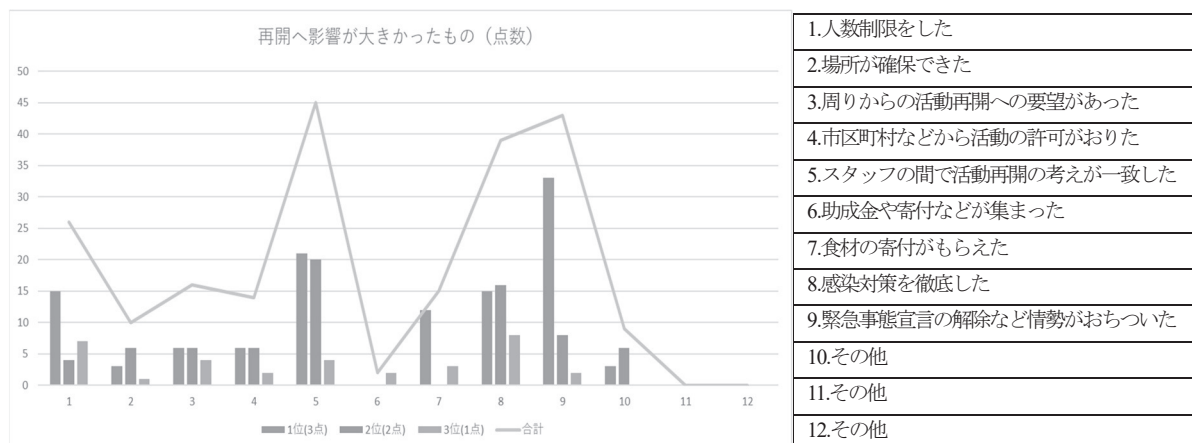


図2 子ども食堂の再開に影響が大きかったもの (N=438)

- ・ここでいう再開は食事提供をする子ども食堂の活動を指し、フードパントリーなどは含まない。
- ・1位から3位まで順位をつけたため、1位は3点、2位は2点、3位は1点と点数でグラフ化した。

次に、上記で子ども食堂の再開に会場の確保が関わると述べたが、実際に子ども食堂が開催地としている場所はどういった所が多いのかが気になったため、Q9の連携についてのアンケートをもとに分析する。

アンケートの回答によると公民館を利用している子ども食堂の割合は22%と一番高いことがわかった。公民館は社会教育施設とされ、運営については社会教育法に基づき、市町村の社会教育行政の一部に位置づけられている。このことから先ほどの図2の“2場所の確保”というのは“4市区町村などから活動の許可がおりた”ことにより解決されると推測できる。

また、“NPO法人 全国子ども食堂支援センター むすびえ”がおこなった「子ども食堂の現状&困りごとアンケート結果」のP3、2子ども食堂の困りごと で最も回答が多かったの

が「会場が使用できない」であった。このことから子ども食堂の活動には場所が大きく関わっている。食事提供をするのであれば、天候に左右されない室内の場所が好ましいし、フードパントリーをするにしても大人数が並んでも周りに迷惑をかけない場所の確保が必要となる。いくら配布できる食材があっても、配布する場所がなければ開催することはできない。

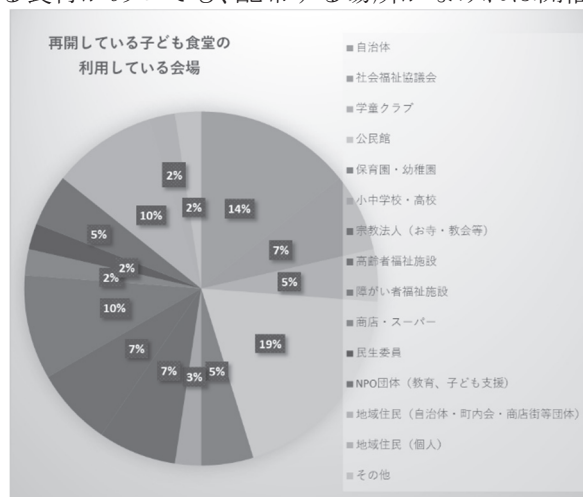


図3 食事提供を再開している子ども食堂が会場として利用している場所 (N=42)  
 ・Q4の食事提供の子ども食堂を再開しているかという間に「はい」と回答いただいた42箇所の子どもの食堂の開催場所を示している。

しかし上記の図3の11月時点で再開している子ども食堂が利用している会場も公民館が一番多い。活動休止が増えた3月と、アンケート調査を行った11月の新型コロナウイルスの感染者数を比較しても、感染者数が増えていることは明らかである。しかし、会場が使えているということは、どのようにすれば会場を利用できるかを考えるようになったからだと推測できる。そのために感染対策の徹底や会場利用者の制限などがおこなわれている。アンケート調査の自由記述にも感染対策についての回答が多かった。

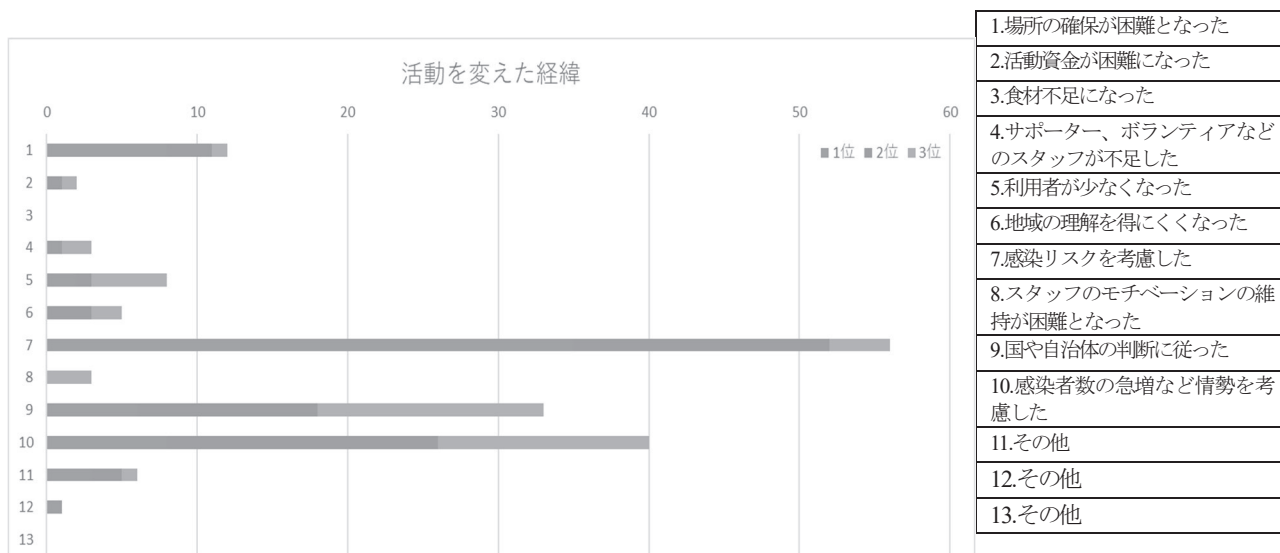


図4 コロナ禍で子ども食堂の活動を変えるきっかけとなった要因の合計 (N=169)  
 (活動変化の例：通常の子どもの食堂からフードパントリー。通常の子どもの食堂から人数制限のある子どもの食堂)

また、上記の図4を見てみると、Q8のコロナ禍によりどのような経緯で活動を変えたかという選択式の間に対しても1位、2位、3位の全ての合計が“7感染リスクを考慮したため”が最も多いことがわかる。このことから感染という問題は子ども食堂に大きく関わり、徹底した感染対策を行うことが出来なければ活動を戻すことも再開することも不可能と言える。

では、実際に自由記述から得られた子ども食堂運営者が行う感染対策について一部紹介する。

子ども食堂がおこなう感染対策（一部）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーブル、イスの消毒の徹底</li> <li>・参加者の検温</li> <li>・人数を制限（例：平常の1/3まで減らす）</li> <li>・テーブル、イスの配置変更（例：間隔をあけて椅子を用意する。壁に向かって食事をするようにテーブルを置く。）</li> <li>・スタッフは一緒に食事をせず、マスクのまま参加者とコミュニケーションをとる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援者や見学者制限</li> <li>・会場の変更</li> <li>・換気の徹底</li> <li>・調理はスタッフに限定（子どもの参加なし）</li> <li>・時間をわけ、1回の人数を減らす （例：一部17：30～18：00、二部18：00～18：30）</li> <li>・感染者が出た時に対応するために名前、住所、電話番号等を受付で用紙に記入してもらう。</li> </ul>

参加者の検温やアルコール消毒はもちろんのこと、テーブルやイスなど多くの人が利用する場所も定期的に消毒を行っている所が多いようだ。また、食事をする際はマスクをはずすため、テーブルやイスの配置を以前とは変えてソーシャルディスタンスを保てるよう配慮している。また、向かい合うような配置をやめ、全員が壁に向かって食事をするようにしている子ども食堂もあるようだ。

上記の感染対策は食事提供を行う子ども食堂での対策である。フードパントリーの場合は、開催時間を少し長めに設定し、混雑する時間を減らせるようにする工夫や、配布の形にドライブスルーも取り入れるなどが挙げられる。

開催場所の収容人数、スタッフの人数等子ども食堂によって状況は様々であるため、一律に感染対策をどうすべきか決めることは出来ないが、参加者やスタッフの検温とアルコール消毒と、テーブル・イス等の多くの人が触れる物の消毒を徹底したうえで、他の子ども食堂の感染対策を参考にしつつ、それぞれの子ども食堂の形にあった感染対策を見つけていく必要があるだろう。

次に地域別の子ども食堂再開状況についてみてみる。



この理由として考えられるのは、豊田市では、市が新型コロナウイルス感染防止を踏まえ子ども食堂のガイドラインを作成したからである。このガイドラインが子ども食堂運営者の様々な不安を軽減させ、活動再開へと後押ししたと考えられる。

**【ガイドライン 内容一部】**

- ・事前予約の推奨
- ・参加人数は利用する部屋の定員の半分以下
- ・実施時間は1時間～1時半程度に短縮
- ・体調不良の場合、参加できないことを事前に周知
- ・調理実習や飲食物提供時の3密回避や感染防止（座席の配置の工夫、換気、消毒等）

#### 第4章 実際のコロナ禍の子ども食堂 東山ぐうぐう食堂

東山ぐうぐう食堂は他の子ども食堂に比べ、高齢者の参加が多い印象を受ける。また、開催してからまだ1年ほどしか経っていないにも関わらず、全体の参加人数も多い。そこで、東山ぐうぐう食堂の紹介の前に、東山ぐうぐう食堂が開催している豊田市の東山地区の特徴について丹辺宣彦・中村麻里・山口博史編著の『変貌する豊田—グローバル化と社会の変化に直面するクルマのまち—』を参考に触れ、こうした高齢者や全体の参加人数が多い理由を明らかにする。

東山地区は中心市街地から3kmほど離れた場所に位置しており、人口は5000人弱のニュータウンである。東山地区の1番の特徴はまちづくりに力を入れている点だろう。

東山地区のまちづくりは自治区が中心となり、祭りやイベントが多く開催されている。祭りでいうと、4月に桜祭り、6月に渋谷フェスタ、8月に納涼夏祭り、10月に秋祭り、12月にクリスマス会、12月31日には越年際がある。このほかにも子ども会と自治区が連携し、春の花植え替え、春の環境美化活動、秋の環境美化活動等が行われているようだ。夏祭りやクリスマス会といった行事を行う地区は多いと思うが、東山地区はそれ以外にも多くの行事を行っていることがわかる。そして、東山地区は行事の参加者を増やすため、小中学生の子ども達の参加や出演の機会を多く設けるといふ工夫を行っている。

子どもの出演の例としては、夏祭りで『子ども太鼓保存会』のメンバーに太鼓を披露してもらい、出店を中学生にボランティアとして参加してもらい、秋祭りでは中学校の吹奏楽部に演奏してもらいなどがある。

実際私が小中学生の頃を思い返すと、小学校低学年は両親や祖父母と夏祭りに参加したこともあるが、学年が上がるにつれ、友人との参加がほとんどとなった。子どもの参加のみであれば参加者数を増やすことは可能だが、年代に偏りが生じてしまい、まちづくりにとはつながりにくい。しかし、この東山地区の工夫を取り入れることにより、子どもの練習に励む姿に親や祖父母が関心を持ち、当日家族で見に来るといった効果が期待される。行事の参加により、地域交流の機会を与えることができ、それにより他の行事への参加へ促すことが可能となるため、1度の参加でも効果は大きい。

こうした、幅広い年代が同じ場所で交流し、同じ時間を過ごすことで地域のつながりを形成することが可能となる。そしてこの地域のつながりが、安心して生活できるような住みやすいまちへと変えていくのだろう。

子ども食堂の参加人数が多いのは、まちづくりの活動から行事などに参加する習慣があるからだろう。そして高齢者の参加が多いというのも、まちづくりの活動で幅広い世代の交流があるからこそだと考える。子ども食堂によっては、子どもの参加が多いことで高齢者が参加しにくいと感じ、参加人数が少なくなるという課題があるようだ、東山地区ではそうした面は感じない。むしろ子どもの参加が高齢者の参加を促しているとも考えることができるのではないだろうか。子どもという存在が中心にあるという点でまちづくりと子ども食堂の活動には重なる部分があると感じた。

では、こうした様々な年代の人が関わる東山ぐうぐう食堂の、コロナ禍前と後の活動について詳しく紹介していく。

開催場所：市営東山住宅 中央集会所

開催日時：月に1回/祝日の月曜日（祝日がない場合はどこかの月曜日）

コロナ禍ではフードパントリーと子ども食堂を分けて開催しているため月2回開催

子ども食堂：17：00～19：00/フードパントリー16：00～18：00

#### ■コロナ禍前の活動

東山ぐうぐう食堂は、参加者は子どもだけに絞るわけではなく、だれでも参加できる形をとっている。室内にはボードゲームやカードゲームなども準備されており、早く来た子や、食事を終えた子は遊んですごしている。また、地域住民の方によるマジックショーも恒例となっていた。

東山ぐうぐう食堂がコロナウィルスの影響を受けたのは下記の表1より、3月からである。感染拡大防止のため市からの中止要請があり、3月開催予定の子ども食堂は中止となった。

活動状況	
2月	通常の子ども食堂
3月	活動休止
4月	フードパントリー
5月、6月	フードパントリー、お弁当販売
7月	フードパントリー、お弁当販売
8月	フードパントリー、お弁当販売
9月	フードパントリー、お弁当販売、 屋外レクリエーション
10月	フードパントリー、お弁当販売、 屋外レクリエーション
11月	子ども食堂（人数制限）再開

表1 東山ぐうぐう食堂の2月から11月の活動状況

#### ■コロナ禍の活動

アンケート調査に東山ぐうぐう食堂は「動きを止めない」「支援を止めない」「関わりを断たない」ことを重視して活動をしていると回答があったが、実際に活動休止していたのは3月のみである。それ以降は状況ごとにできることを探し活動を続けてきた。コロナ禍での新たな取り組みについて紹介する。



① フードパントリー

普段の開催場所が使用停止になったが、入り口前の使用許可がでたため、集会所「前」で開催された。密を避けるためスタッフの人数も最小限に抑えた。配布したのものとしてはパンやお菓子、レトルト食品などがある。また、寄付が多くいただけたことから開催数は月1回から2回に変更することもあったようだ。

② キッチンカーとのコラボ企画

社会福祉協議会の提案で、キッチンカーとのコラボ企画が実現。出来立てのパスタを子ども食堂と同様低価格で販売し、持ち帰って家で食べてもらう。

③ お弁当販売

助成金を受け取れたことから、店舗に発注し、子ども食堂同様低価格での販売。

お弁当販売について	
良かった点	改善点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・お弁当のため調理の必要なく子どもたちもすぐ食べることができる</li> <li>・その場で調理しないため、感染や食中毒などを防ぐことができる</li> <li>・栄養バランスの良い食事を提供できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室内でも食事ができるようにしていたが、持ち帰る人が多かった</li> <li>・限定50食のため早くから人が集まった</li> <li>・告知を大きくできなかった。</li> <li>・お弁当販売のため低価格ではあるが、お金がかかってしまう。</li> <li>・普段参加している子の参加がなかった。</li> </ul>

改善点の解決策としてでた案をいくつか紹介する。

東山ぐうぐう食堂は居場所づくりも重視しているため、間隔はあるものの、誰かと一緒に食事をしてもらいたいという思いから子ども食堂を再開した。よって室内で食べていく人が多いことを期待したが、実際は持ち帰る人が多数であった。この原因をチラシに注目し、お弁当と掲載していた点から持ち帰るものだと思わせてしまったと考えた。それを踏まえ解決策としては次のチラシにはお弁当という言葉は入れずに子ども食堂開催とだけお知らせすることとした。また、販売は室内で食べていく人に限定することとした。

次に普段参加してくれている子の参加がなかった点である。この問題には複数の改善点が関係している。まず、密を避けるために大きく告知することができなかった点である。それにより開催日が知られていなかった。そしてそれに加え、お弁当ということで低価格でもお金がかかってしまう点も関係する。コロナ禍前の子ども食堂であれば、調理に手伝ってくれた子は無料で食事をするのができたため、開催日を知らなくても参加が可能であった。しかし今回のケースは開催日を知らず、両親が仕事で家にいないためお金の準備をすることができなかったことで起きた。小学校低学年の子であると、急にお金の準備ができないことは今後も起こる可能性がある。そこで今後もそういったことがあったときに備え、案として挙げたのは、お米を炊いて準備をしておき、おにぎりを自分で握れるようにするというものである。実際に2021年の1月の子ども食堂で、おにぎりを自分で握るといふ子ども食堂が開催された。

### ミニ夏祭り（フードパントリーと同時開催）

多くの夏祭りが開催中止となったため、少しでも子ども達に楽しんでもらい、思い出を残してほしいという運営者の思いから企画された。

ミニ夏祭り企画		
① わなげ	② 千本くじ	③ ふよふよボールすくい
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1～9の数字が書かれた的が9個。</li> <li>・1人3回。</li> <li>・入った数字の合計数プラス2個景品がもらえる。</li> <li>・景品はスティックコーヒーやふりかけ、紅茶のパックなど。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人1回。</li> <li>・複数ある糸の中から好きな糸を選ぶ。選んだ糸の先にある景品を受け取ることができる。</li> <li>・景品はグミなどのお菓子や、冷凍のお肉など。</li> <li>・大人の方もうれしい景品が多かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水で膨らむふよふよボールをおたまですくってもらう。</li> <li>・ふよふよボール以外にも缶ジュース、缶詰など水に濡れても大丈夫なものと一緒に入れることで、大人の方も参加できる。</li> </ul>

参加者自身のアルコール消毒はもちろん、わなげの輪や、ふよふよボールすくいのおたまなどは人の入れ替わりごとにアルコール消毒を行った。また、スタンプラリーを用意することで各企画に参加したかどうかわかるようにした。それにより、すいている所から回ってもらうことができ、密になるのを防いだ。また、受付でも人数調整を行った。

#### 調理の子ども食堂再開

11月からは人数制限などを設け、子ども食堂が再開された。食事提供まで子どもたちは室内・外で自由に遊んで時間を過ごす。マスクを外すことはできないが、コロナ禍前の状態に少し近づいたように感じた。

先ほども述べたが、2021年1月の子ども食堂ではご飯を炊いて子どもたち自身におにぎりを握ってもらった。数人のスタッフが手袋を付け、ビニール袋にご飯を入れて子どもたちに渡す。子どもたちもアルコール消毒をしたうえで袋の上からおにぎりを握ることで感染対策を行った。

## 第5章 子ども食堂再開に必要なこととは

私は、第3章と第4章を基に子ども食堂再開を左右する要因は大きく3つあると考える。まず1つ目は行政である。すべての子ども食堂にあてはまるわけではないが、やはり行政が運営する会場を利用する子ども食堂は多い。食事提供のため調理場などが必要であり、そうした設備が整っているという意味で公民館などは子ども食堂の開催地に適している。会場がなければ子ども食堂の開催はできないため行政の判断は再開を左右する要因といえる。

また、会場が個人宅など使えたとしても自粛要請ができれば継続して活動することは困難である。そういった社会情勢を考慮した行政の判断も大きく開催に関わる。市や区によって状況が異なるため、難しい部分もあると思うが、豊田市がガイドラインを作成したように、市が中心となり活動を支援するというのは重要だと考える。市が作成することで正確な情報と判断でき、対応が必要な事態が起きても子ども食堂運営者は焦らず適切に処理することが可能となる。

次に2つめは感染対策である。現在も緊急事態宣言が延長するなど新型コロナウイルス

が落ち着く様子はいかがえない。だからこそ、新型コロナウイルスの感染の危険と向き合い、どのように対策するかを考えていかなければならない。食事提供を再開している子ども食堂運営者の方も、感染対策については試行錯誤を重ねている段階だと思われるため、どのような感染対策が有効であるかは、今回の調査で明らかにすることはできなかった。

また、第3章で述べたように子ども食堂の開催場所や、参加人数は様々であるため、全ての子ども食堂に当てはまる感染対策を見つけることは難しい。人数制限をするとしても、ただ人数を減らすのか、それとも人数を減らして何回かにわけて開催するのか。何回かにわけて開催するのであれば、早く着いた参加者が待機する場所が必要になるなどの課題も出てくる。参加者の人数はどれくらい減らすべきか、スタッフは何人必要か、告知の方法はどうするかなどの感染対策に関わる課題の解決は子ども食堂の開催を重ねるごとにそれぞれの子ども食堂が合う形を見つけていく必要があると考える。しかし、今回のアンケート調査で多くの子ども食堂の回答を得ることができたため、他の子ども食堂の感染対策等参考にさせていただければと思う。

最後3つめは運営者側の再開に対する意見の一致である。今回のアンケート調査を通して、社会情勢や会場の使用停止など子ども食堂自身では解決できない問題により開催中止の判断をした子ども食堂が多いことが分かった。しかし、先ほど述べたように今後は対策方法が確立され、今までの問題が少しずつ制限などを加えることで解決されていくことが予測される。そうなったときに最終的に開催を左右するのは子ども食堂運営者間の意見が一致するかである。今回のアンケート調査は運営者の代表の方に回答をお願いしたため、ボランティアスタッフの意見まで集計することはできなかった。しかし代表の方の回答でも数件、スタッフが集まれないから再開できないという意見もあった。高齢者と同居しているため外出ができないという環境にあるなどスタッフの状況も様々であり、ボランティアであるため強制することはできない。その中で最低限必要なスタッフを集めることができるかが、開催へとかわってくるだろう。

## 第6章 おわりに

今回のアンケート調査の分析により、新型コロナウイルスによって受けた影響や、再開を左右する要因で他と比べ割合が高い回答はあるが、特に突出している点はみられなかった。これは子ども食堂の形が様々であり、地域の状況の違いや、新型コロナウイルスが与える影響の広さをあらわしている。子ども食堂によって受ける影響が違うからこそ、再開や継続は難しい。しかし、子ども食堂運営者は立ち止まることはない。実際に活動ができていなくても、思考は立ち止まっていないのだ。それは自由記述から読み取れる。多くの子ども食堂が現状の問題と葛藤し、解決策を探している。そうした子ども食堂が少しでも早く、望む活動ができる環境になることを願い、私自身今できることを探し、活動していきたいと考える。

また、今回のアンケート調査で運営者の方々の子ども食堂への強い思いが明らかとなった。実際子ども食堂に関わる中でもそうした思いを活動内容や話し合いを通して感じることは多い。私はこれほど子ども食堂や、そこに参加する人々のことを思い、活動していることの原動力が何であるかに興味を持った。この観点について次はアンケート調査やインタビュー調査を用い、分析していきたいと考える。

【参考文献】

- ・特設サイト新型コロナウイルス，最終閲覧日：2021年2月2日
- ・NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ，最終閲覧日：2021年2月3日
- ・子ども食堂マップ 2019年版（愛知版），最終閲覧日：2021年2月1日
- ・子ども食堂再開を行政が後押し 豊田市、対コロナ指針作成，『中日新聞』 2020年6月12日 夕刊 p 1
- ・丹辺宣彦・中村麻里・山口博史編著（2020）『変貌する豊田—グローバル化と社会の変化に直面するクルマのまち—』 東信堂